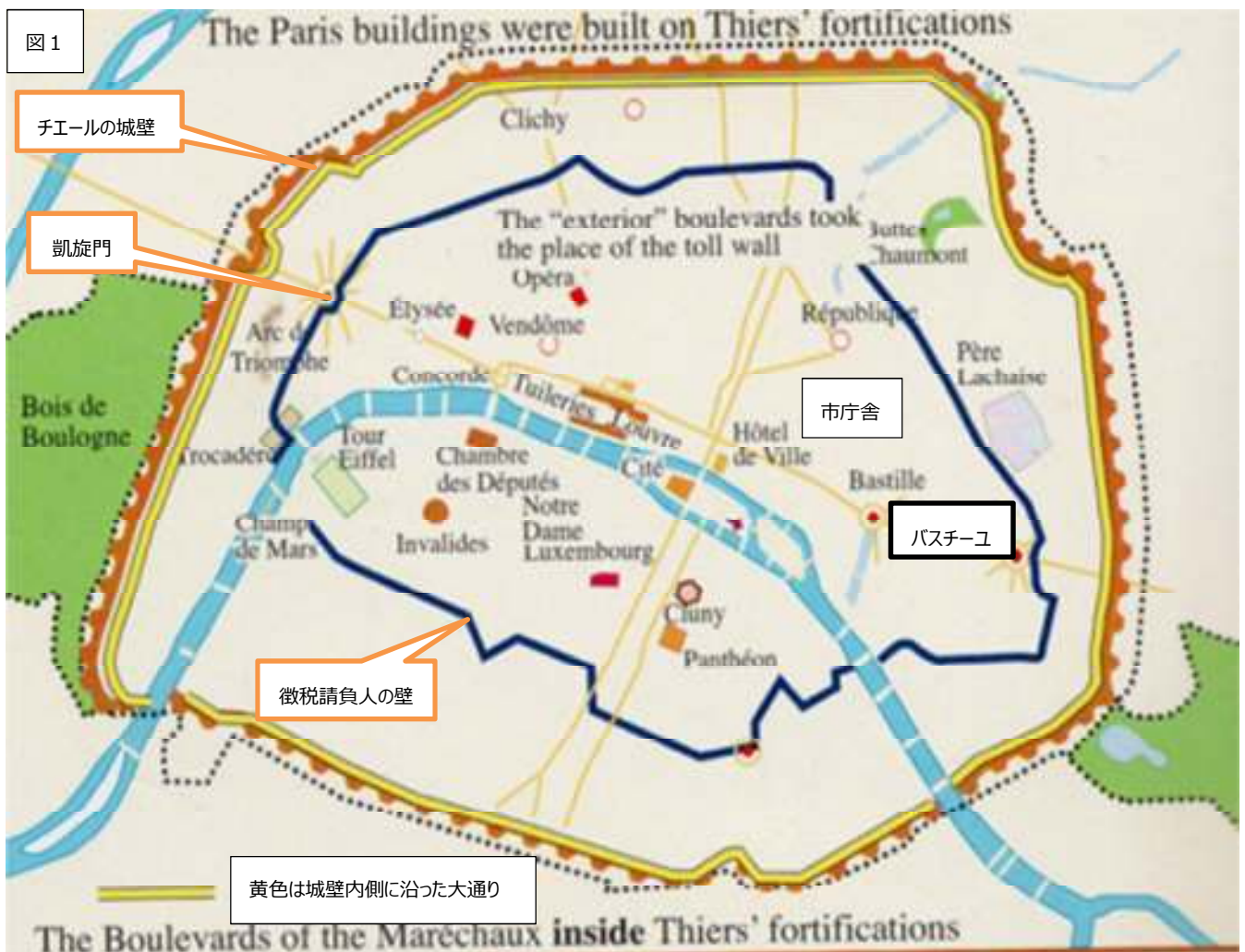


はじめに

「フランス城郭シリーズ1」で、2000年前のガロ・ローマ時代（フランスのローマ時代）以降にパリに建設された**六つの環状の市壁・城壁**を紹介し、今回のティエール（チエール）の壁は6番目のパリ防衛用城壁で最後の壁である。図1は、その時に「参考地図2」として引用したもので、19世紀のパリを囲む二つの環状の壁であるが、内側の紺色の線が徴税請負人の壁（以下「**徴税壁**」と呼ぶ）で外側の茶色がティエールの城壁である。徴税壁はフランス革命の初期段階で徴税を中止するが、革命でレイ 16世が処刑されて王政が廃止された後、ナポレオンが皇帝になり帝政になってから徴税が復活し、1846年にティエールの城壁が完成した後の1860年にも、かなり残っていた。ただし、徴税壁の内側に過去建設されてきた市壁・城壁は、約200年前のレイ 14世時代に撤去されており、19世紀半ばのパリは図1のようであったと考えられる。**Thiers wall**は当時の首相アドルフ・ティエール Adolphe Thiersの名前を付けているが、その発音は英語では**ティエール**かな？と思っていた。高校・大学の歴史書で定評のある、山川出版社のフランス史には城壁の記載はないが、首相の名前は**チエール**と記載されているので、以後は**チエール内閣**が建設した**チエールの壁**とする。



1. 19世紀半ばにもなって**何故パリに防衛上の城壁を作るか？**

- ① **近代の変化**：中世末期の15世紀までのパリの防衛は、何世紀もの間に建設を繰り返した城壁に頼ってきたが、16世紀半ばにはパリは郊外に広がり城壁内は狭すぎて、大砲・鉄砲による近代戦争には時代遅れになった。1670年、ルイ 14世はパリを囲んでいる城壁をすべて撤去するように命令し、首都パリは城壁ではなく軍隊が素早く防衛できるような**ブルヴァール**（boulevard）と呼ばれる街路樹のある広い道路の建設を進め、軍事力を近代化し国全体の防衛

の為に軍事施設技術者のヴォーバンに指示し、陵堡式要塞を国境に建設し、サン・マロなどの港湾施設も整備した。しかし、ルイ 14 世から 200—300 年後の 18 世紀後半に徴税壁が建設され、フランス革命が起こって王政が廃止された所までは前回説明したが、ひき続き「波瀾万丈の世紀」の歴史を説明する。

② ナポレオン戦争

フランス革命後の最大事件は、ナポレオン戦争である。ヨーロッパ全体を混乱に陥れ、歴史的には面白いが、本論ではないので図 2 だけに留めたい。出典：詳説 世界史図録第 3 版 山川出版社



図 2

ナポレオンは 1812 年のロシア侵攻に失敗し退却していた。ロシアは勝利を契機に、翌 1813 年にオーストリア、プロシア、イギリス、スウェーデン、スペインその他フランスに敵対する国々と第 6 次同盟（以下「同盟軍」）を結成した。そして、同盟軍は 1813 年秋にはライプツヒの戦いでフランスに勝利した。その後はフランスに好意的だったドイツのライン同盟は崩壊し、ライン川の東側でナポレオン軍が占拠維持していた地域の結束も緩み、同盟軍はライン川を越えてフランス領土内に侵攻した。1814 年 1 月、総勢 40 万の同盟軍は 3 グループに分かれてフランス北東部に入った。

百年戦争中にイングランド王ヘンリー 5 世がイギリス軍と共にパリに侵攻して以来、外国軍がフランス領内に侵攻したのは約 400 年ぶりであった。1814 年 3 月 30-31 日に同盟軍はパリ近郊に迫り、フランス軍とパリの戦い(The Battle of Paris 1814)を戦い、31 日にフランスは降伏し、元老院は皇帝廃位を決定した。ナポレオンはエルバ島に流刑された。たった 1 日の戦いで首都パリが征服された事が、パリの城壁建設へのプレッシャーとなった。

図 3 は、3 月 31 日に同盟軍のオーストリア・ロシア・プロシアの皇族・貴族が勝利に歓喜して、サン・マルタン凱旋門からパリに入ってきた様子であり、パリを要塞化する必要が決定的となった。



図 3

そして、ルイ 18 世が復位した。しかし、ナポレオンはエルバ島を脱出し、途中で軍勢を増やしながらパリへ進軍した。復古王政に不満の民衆に支持されて、国民投票で皇帝復歸したが、**ワーテルローの戦い**（ベルギー）で敗れ、最終的に退位に同意させられて、復歸は「**百日天下**」で終わった。

< 余談 > **ネルソン提督**が率いるイギリス海軍は、ナイルの海戦、トラファルガルの海戦、コペンハーゲンの海戦でフランス海軍に勝利し、その都度水兵の制服（セイラー服）の襟に白線を入れ、ナポレオン戦争終結時には白線が三本になった。1902 年の**日英同盟**の後で日本の学生の制服にイギリス海軍の**詰襟**の学生服と三本線の**セイラー服**が採用された。

③ 七月革命

1789 年に始まったフランス革命から 41 年経って又しても革命が起きた、**1830 年 7 月 27 日から 29 日**にパリで起きた七月革命である。1815 年の王政復古により王位に就いたルイ 18 世は、フランス革命による成果を全く無視して、時代錯誤もはなはだしい反動的な政治を行った。この復古王政による政権は、アンシャン・レージュムよろしく貴族や聖職者を優遇する政策をとり、市民たる**ブルジョアジー**の不満は当然高まることになった。フランスはあたかも革命以前の状態に逆行してしまったようであり、ルイの後を継いだ弟シャルル 10 世も言論の弾圧、旧亡命貴族の保護の強化などを始めた。ギロチンを怖れる国王シャルル 10 世は退位し、ランブイエ城からオーストリアに亡命した。後継政府には共和派の反対を押して、「国民王」**ルイ・フィリップ**が立った。ここにフランスは立憲君主制に移行した（7 月王政）ルイ・フィリップ王も 18 年後の二月革命（1848）で追われ、最終的にはルイ・ナポレオンが大統領に当選、4 年後に皇帝に即位、**ナポレオン 3 世**。

下の写真は、バスチーユ広場の**七月革命記念柱**（筆者撮影 @2008 年 3 月）と、ドラクロアの「**民衆を導く自由の女神**」（ルーヴル美術館）但し、ドラクロアの原文は、「民衆を導く自由」であり、女神は無い。



図 4、台座に 1830 年 7 月 27,28,29 日

図 5、左手に銃右手に三色旗、なぜ裸？

2. チエールの城壁

① 参考文献：本テーマの日本語の文献が見当たらないので、下記 URL の英語版ウキペディアを参考にした。

・ [Thiers wall - Wikipedia](#) ・ [Battle of Paris \(1814\) - Wikipedia](#) ・ 他多数

② チエールの城壁の概要

・図 6 は、図 1 のチエールの城壁（以下「本要塞」）と、周辺に城壁から 2~5km 離れて **16 基の陵堡式要塞**がライン状に配置され、それらがセーヌ川とその支流を濠としてパリの総合防衛システムを構成している事を示している。フランス語のサイトで見つけた地図だが、地図本体に書込まれている「**パリと周辺の防衛 1841 年**」から、チエールの城壁工事着工の 1841 年に発行された図で、建設計画図と考えられる。

・それにしても、高低差が少ない平野の中だから分かるが、川の蛇行は凄いですね～？日本のように「川の北側」とか言わずに、川の流れを確かめて上流から下流を見て、右岸とか左岸とか呼ばないと間違うのですね～？

・本要塞は、図 1 で「チエールの城壁」と記した茶色の環状壁で、戦争を想定した軍事上の城壁だった。位置は、現在の

パリを囲む自動車専用環状道路で、その内側の黄色は「元帥大通り Boulevards of Marechaux」（東京にもマツカ―サー道路が計画された）である。何キロメートルか毎に区切られて、將軍や元帥の名前が付いている。すべて皇帝ナポレオンの第一次帝政時代の將軍や元帥である。

・長さ33kmの主壁は一般には単に「要塞」と呼ばれており、**94の陵堡**を有し、パリ南東部の右岸からNO.1が始まり、反時計回りに回って左岸の No.94 で終わる。指揮・命令系統の為に主壁は9戦闘区に分かれており、各戦闘区には8~12の陵堡が含まれている。主壁には主要国道など一級道路の為に17か所にゲートが設けられており、二級道路の為に23か所の通行口と地区の住民の通用門が12か所設けられている。ゲートはバリアーで閉め切ることができ、通行料金や税金徴取のブースがある。

主壁には川や運河と交差するために5か所に開口部が設けられ、後年には8か所で鉄道通過門が設けられた。

③ 16基の陵堡式要塞

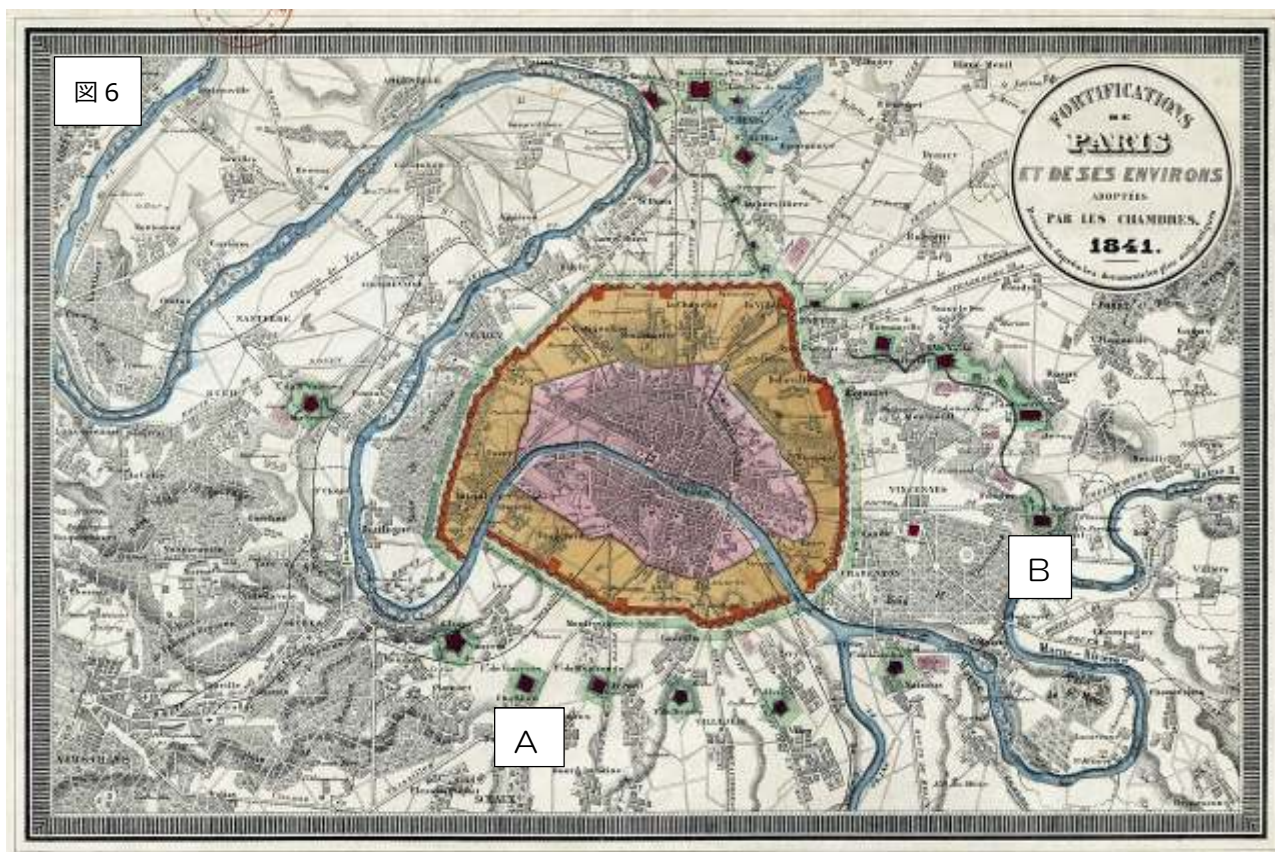
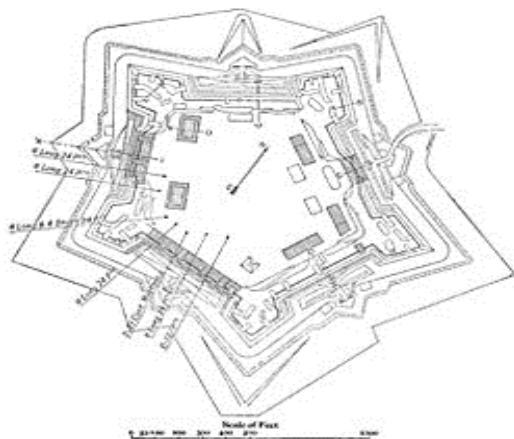


図6

④ 16基の陵堡式要塞の内 図6のAとBの2例を紹介する



A Fort d'Issy



B Fort de Charenton

⑤ 図7は城壁の断面図、左が城郭中央で右が城外、日本の城にも石垣の手前に空堀と土で作った斜堤がある例あり

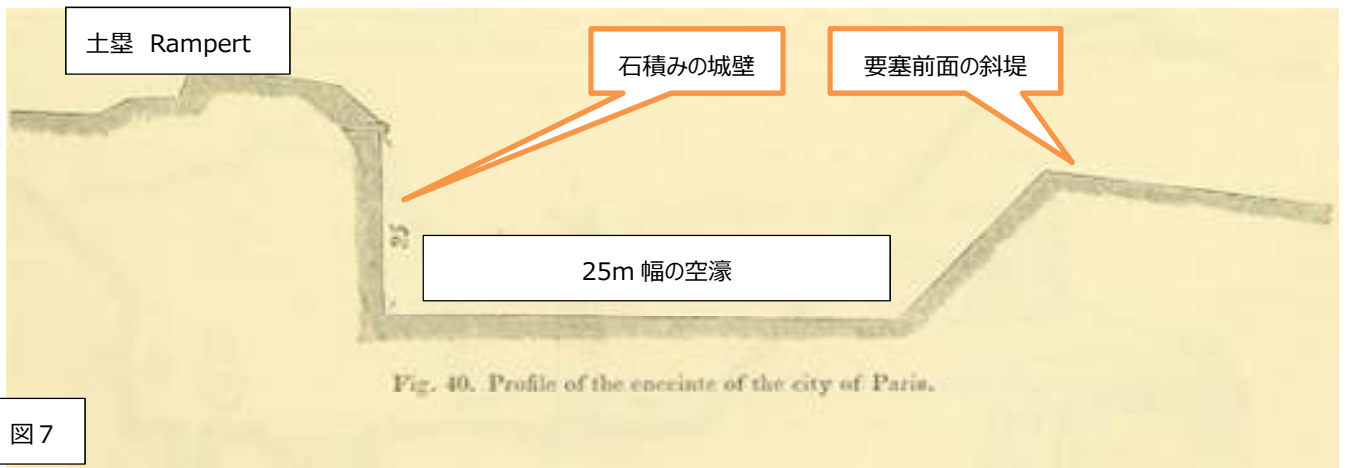


図7

図8はゲートの一つ、図7とは左右逆である

図9は二級道路の為の23か所の通行口の一つ

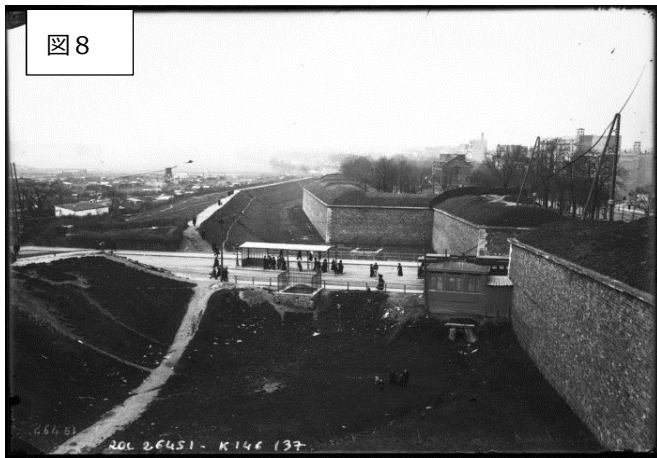
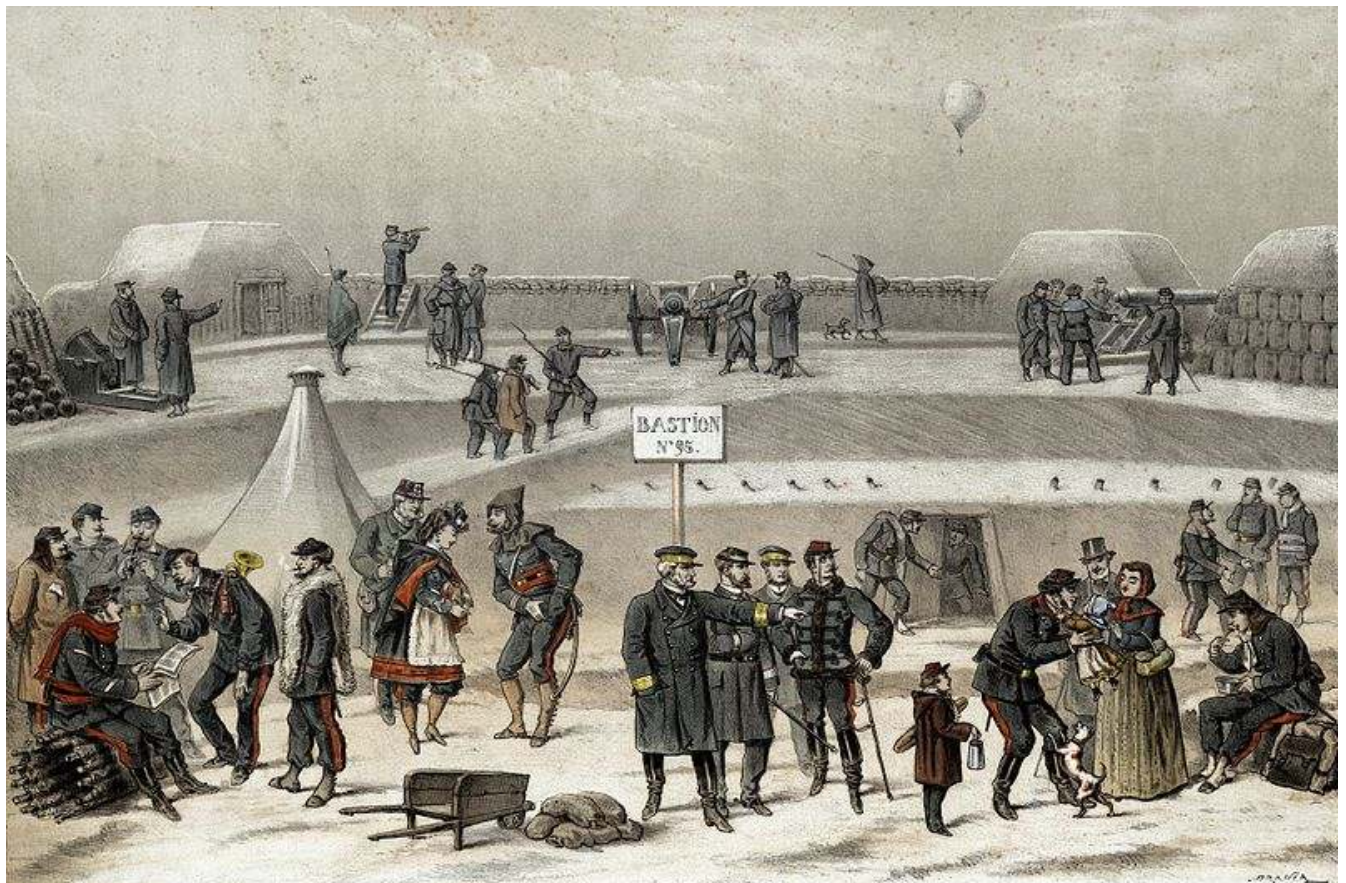


図8



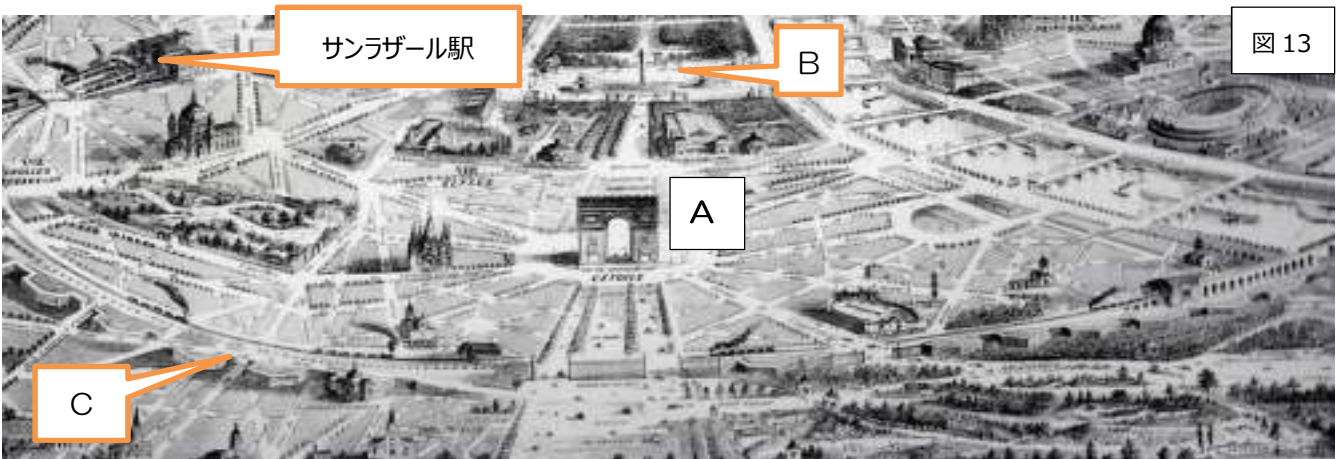
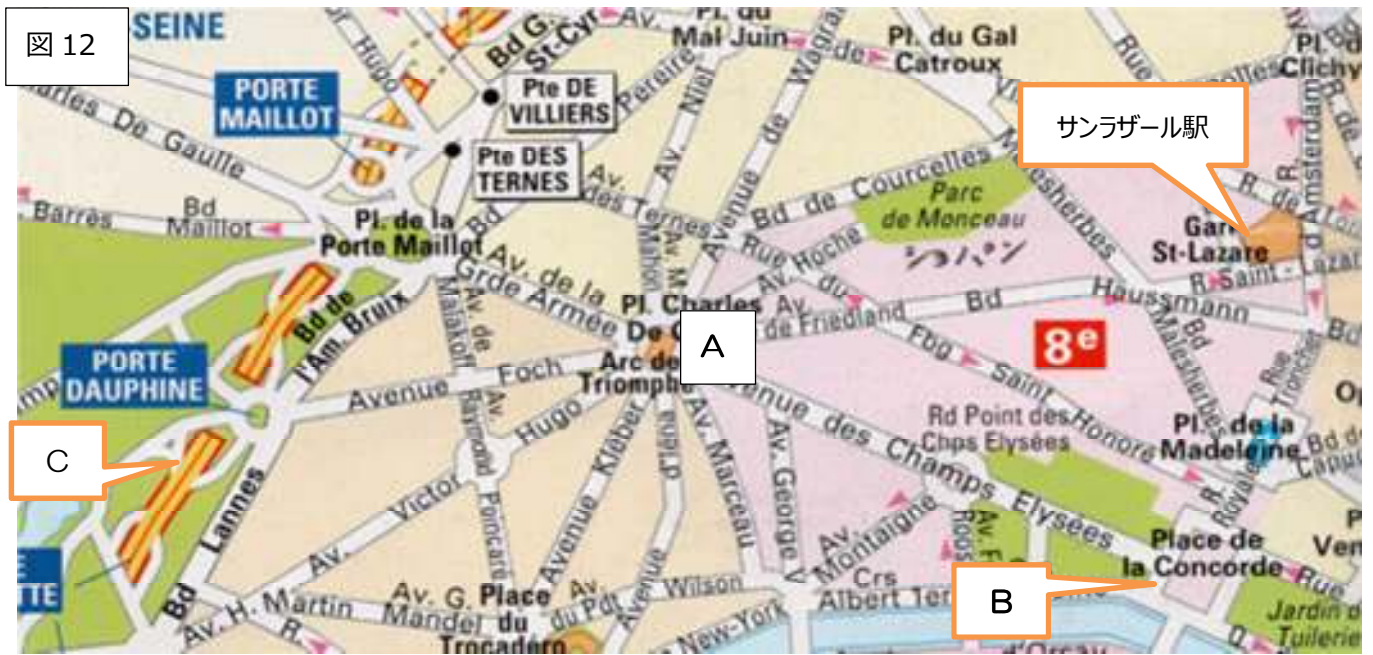
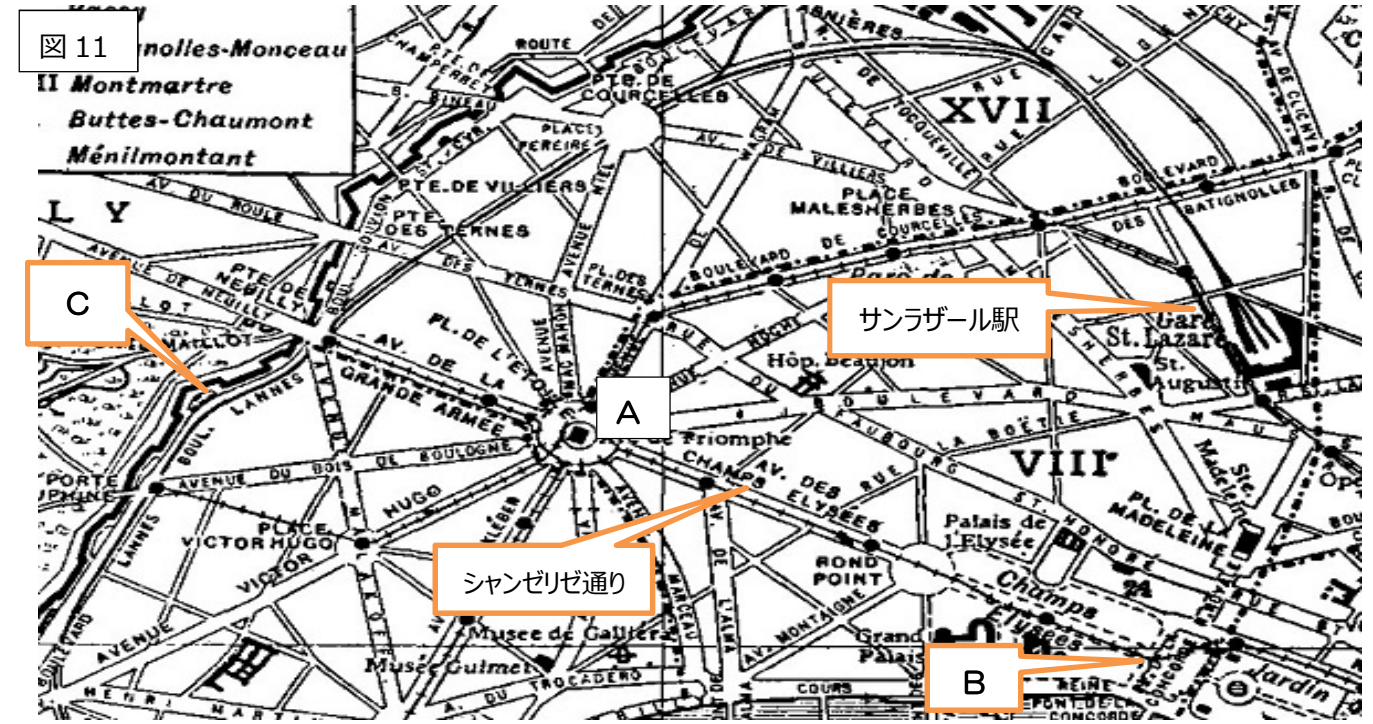
図9

⑥ 文献には陵堡は94あると記載されているが、下の挿絵には95番目の陵堡（BASTION No.95）と書かれている



⑦ 1911年のチエールの城壁図(図11)と現在の地図(図12)1867年の絵(図13)の比較検討

Aは凱旋門、Bはコンコルド広場、Cは城壁(現在は自動車道路)、



1867年、明治維新の前年だが、イギリスより遅れながらも城壁に沿って蒸気機関車の鉄道が開通している。

3 年表

1670	ルイ 14 世,パリの市壁・城壁の撤去を命令 →パリの防衛からフランス領土の防衛へ方針転換
1715	ルイ 14 世没、曾孫が 5 歳で 15 世即位し、オルレアン公フィリップ II の摂政後、1723 年に親政開始
1774	ルイ 15 世没、孫がルイ 16 世 (b1754-a1774-1792-e1793) として即位
1776	(アメリカ独立)
1784	～91、パリに 徴税請負人の市壁建設
1789	7 月 14 日、 バスチーユ要塞襲撃 、農民一揆全国に拡大、ヴェルサイユ行進、国王一家をパリに連行、
1791	徴税請負人の市壁 での徴税を中止
1792	フランス、オーストリアに宣戦布告、8 月パリ市民、 チュイルリー宮襲撃、王政廃止・共和政宣言
1793	1 月前国王 ルイ 16 世処刑 、9 月 ロベス・ピエールの恐怖政治 始まる、10 月 マリー・アントワネット処刑
1794	7 月 ロベスピエール ら処刑、恐怖政治]終わる、
1795	10 月王党派の反乱、 ナポレオン・ボナパルト により鎮圧、
1796	3 月ナポレオン軍、イタリア遠征に出発、5 月ミラノに入城、11 月オーストリア軍に勝利、
1798	2 月仏軍、ローマに入城、5 月ナポレオン、エジプト遠征に出発、8 月仏軍、 英海軍にアブキール湾で敗戦 徴税請負人の壁での徴税を復活
1800	5 月ナポレオン、第 2 次イタリア遠征に出発、オーストリア軍に大勝、仏、スペインから米・ルイジアナを購入
1803	英、仏に宣戦布告 、ナポレオン、(カレーの南) ブーローニュ にイギリス上陸作戦本部を設置、
1804	5 月、皇帝ナポレオン・ボナパルト即位、フランス第 1 帝政 (～14) 、12 月、戴冠式を挙行
1805	3 月 ナポレオン、イタリア国王 に即位。10 月 英ネルソン艦隊トラフルガル海戦 で 仏・西艦隊を破る
1806	ヴェネツィアは、ミラノを首都とする ナポレオンのイタリア王国 に併合される。
1812	ナポレオン軍ロシアに遠征しモスクワに入城するも撤退、壊滅する
1814	ナポレオン、皇帝を退位、エルバ島に配流。ルイ 16 世の弟がルイ 18 世として即位、(第 1 復古王政)
1815	ナポレオン、エルバ島を脱出、パリに帰還、百日天下、ワーテルローの戦い、英ウエリントン軍に完敗、
1820	ウイーン体制
1821	ナポレオン、セントヘレナで没 。死体の真相は不明、パリ・アンヴァリッドの遺体はセントヘレナの世話人か？
1830	7 月 27 日～、 七月革命 、シャルル 10 世退位、ルイ・フィリップ即位、ドラクロワ「 民衆を率いる自由の女神 」
1836	2 月 チエール 内閣成立、Their の仏語発音は チエール が近いのか？
1841	パリに最後の市壁、 チエールの市壁 の建設を開始) (アヘン戦争)
1846	チエールの市壁完成
1848	2 月革命、ルイ・フィリップ亡命、七月王政崩壊、 ルイ・ナポレオン が大統領に就任 (第二共和政)
1852	ルイ・ナポレオンが皇帝に即位、 ナポレオン 3 世皇帝 に即位、(第二帝政～70)
1853	ナポレオン 3 世 、オスマン、セーヌ県知事に就任、 パリの都市計画に着手 (クリミア戦争)
1855	パリ万国博覧会 、ボルドーの赤ワインの格付けが決まる (アロー号事件)
1860	大半の徴税壁が破壊 された (南北戦争)
1868	(明治時代～)
1869	(スエズ運河開通)
1870	普仏戦争～71 日本は海軍は英国に、陸軍はフランスに学ぼうとしていたが、仏陸軍からドイツに変えた
1889	5 月、パリ万博開催 (～11) 、11 月、 エッフェル塔完成
1894	露アレクサンドル 3 世は 露仏同盟 を締結した→1900 年のパリ万博に合わせて アレクサンドル 3 世橋 寄贈

以上 竹本 修文